助殿驚かせ給いて、博士を召して占わせける。博士暫く考え、これは正しく怨霊のなす処なり、此の儘指し置かるるときは悪しかりなん、神に祝い祭り候わば、霊魂の仇止むべし、と憚ることなく申し上げる。助殿聞こし召し、さては疑いもなきことよな、さあらば、と仏師を召し下し、五郎が御影を作らせける。押切に御堂建立し若宮権現と崇め奉り、さて、神主を召し集め七日七夜、神楽をし給いける。かの霊魂も嬉しくや思うらん、これより怨霊仇をなさざりける。

助殿仰せけるは、事序でに国家安全、武運長久の御祈祷仕るべし、と諸社山々へ使者を以って仰せ付けられ給いける。秋田中、高僧貴僧智者上人集まり、神前にさまざま供物を供え大法秘法を行い、御祈祷なされ候いしは、ありがたかりける次第なり。

御戒名、花嶽院殿心公大居士と申し奉る、若宮大権現これなり。今の世まで月々二十八日に若宮参詣限りなし。

然るに御社領二百石付け置かれ花嶽山石頭院と改め、松原の補陀寺九代草庵和尚移し奉り、若宮権現の御弔いなされける。それより霊気崇りもなかりければ、国民豊かに栄えける。愛季公の御威勢誠に周公の御代ならん、と悦ばざるはなかりける。

しかるに定めなきは浮世なり、かかるめでたき折節に一の難儀できたり、その頃天下の武将をば征夷大将軍源家康公と申し奉る。頃は慶長七年春の頃、御上洛の砌、愛季殿を関東三春へ御国替え

仰せ付けられける。その後は大守佐竹義宣公と申し奉る。

義宣公、御鷹野に出給いし時、一日市村石頭院にて御昼休み遊ばされ、住持を召されこの寺の寺号山号何と申すぞ、と御尋ねありければ、光山和尚畏って、花嶽山石頭院と申し上げる。義宣公聞こし召され、実、清源石頭という本属あり、今より清源寺と申すべし、と仰せ出されける。今は青原寺、今に至るまで若宮権現の参詣限り無し。千秋万歳。

（完）

「秋田軍記」は、南秋田郡男鹿と山本郡檜山鹿渡の旧家で写本の形で二、三冊あるようである。原本がどれかは、わからない。ここに収録した「秋田軍記」は、八郎潟小池の旧家にあった「千田家の秋田軍記」を底本にした。

（校訂者　中富たつ子）